

『自棄食い三題 その一』

明星学園 宮下 智

今から思えば、まだ僕らが、重度の知的障害者の支援が何たるかを何も知らなかった頃、中学生との交流会で見せるY男さんの行動は、本当に心からこの活動が大好きで、心待ちにしているように見えたのだった。

まず十名ほどの中学生が玄関から建物の中に入ってくる。女子生徒さんの数の方が大概は多い。まだこの時点では、どの中学生の顔も緊張で強張っている。職員がメンバーさん方と中学生とのペアリングのためにオリエンテーションを始める。一人ひとり、相性やメンバーさん方の好みを観察、判断しながらのペアリングと活動のガイダンスである。

ところが、Y男さん、こんな職員の悠長な対応を待ってられないというような勢いで、さっと二人の女生徒の手を引くと、あっという間に靴を履いて散歩に出かけて行ってしまふのである。毎回のことである。しかも彼の選び抜いた女生徒は顔立ちが整っていることが多いので、職員たちはいつもこう呟いていた。「Y男さん、やっぱり女の子が好きなんだね。しかもちゃんと見る目があるよね」なんて。今から思えばちょっと失礼な話である。

さて、そんなY男さん、気がついてみればちゃんと怪しい行動がついて回っていたのである。しかし、気がつくまでには、何年かの月日を必要としている。だって頭の中は「Y男さんは中学生と交流会が大好きであり、かわいい女の子との散歩をこよなく楽しみにしている」という考えに凝り固まっているのだから、新しい発見をするなどということとはとても無理な話なのである。

気がついた怪しげな行動とは、〈確かに一番に散歩に出かけていく、しかし、あっという間に戻ってきて、そして今度は違う女生徒と散歩にまた出かけていき、またすぐに戻ってくる〉という姿である。この行動とて、Y男さんが散歩大好きであるという前提に立てば、なにも不思議ではない。何回も何回も散歩に、いろいろな女生徒と出かけたいたのだと解釈すれば十分理解可能だからである。ところが、付き添った中学生の証言によれば、彼の散歩の行き先は、近くの畑だったり、農芸班が収穫したばかりの野菜が置いてある倉庫だったりして、彼はそこにあるニンジンや大根、あるいは玉ねぎを生のまま丸かじりにして、戻って来ているというのだ。どうりで帰りが早いわけである。ここまでの情報が明らかになって、初めて「これは怪しい！」ということになっていく。

まずもって、彼は野菜が大嫌いである。煮たり、焼いたりしてある野菜は、例えばカレーの野菜などは全く問題ないが、生野菜ときたら、断固拒否、その当時でさえ（今はもう完全だが）ほとんど食べていないだろう。その彼が、畑の野菜を生で、丸かじりしているというのである。これは断然怪しいのである。何かきっと理由があるはずである。理由がなければこんな行動を人間（確認ですが、重度の知的障害者も人間ですよ）は起こすはずがないからである。

ところがどうだろう？多くの人たちは、重度知的障害の方々のこんな行動をみて、しかも自閉症の方のこんな行動を見て、「きっと理由があるはず」と思ってくれるだろうか？「知的障害が重いから（ちょっと語弊があるけれど、世間的に、平たく言えば教えても教えても、ちっとも理解できない馬鹿だからという意味です）、畑の野菜でもなんでも、生で丸かじりしているのだろう。食事の生野菜はダメでも、畑の野菜は新鮮で、美味しいのではないか。」なんて考えるに違いない。

僕らは、こう考えることにした。人間が絶対したくないことを、無理にやってしまう時の気持ちはどんな時なんだろうかと。そして、〈生野菜を食べる〉ことを考えの中心にしては、なかなか想像力が働かないから、〈酒を飲む〉で考えたらどうだろうなんて。「これ以上は飲めない」と思って「でも飲んでしまう時の気持ち」これだったら想像できそうではないか、そうだ、〈自棄酒だ〉とね。

そう、畑の野菜丸かじりは、自棄酒ならぬ自棄食いなのですよ。そう理解していけば、彼の気持ちは手に取るように解るようになります。〈嫌なこと〉をしているから、自棄食いをする。とすれば、その嫌なことは〈散歩〉、ここまで考えてくれば、今までの思考の全ての前提条件がガラガラと崩れていくのが確認できます。散歩は大好きではなかったのです。かわいい女の子と一番を争って散歩に出かけて行ったのは、偽りの姿だということなのです。

では、なぜ彼はそうしていたのか？これは大きな疑問です。しかし、それはこう考えれば、謎解きができます。①交流会、彼は職員や中学生の期待に応えようとします。②それは楽しく一緒に散歩に行くことだという考えに到達します。③一番初めに、中学生を選抜していかにも楽しげに散歩に出かけるという姿になります。④でもその行動は、この上もない嫌なことであるので、自棄になって、畑の野菜を取って丸かじりすることになります。⑤伝わらない思いは、反復的な行動を引き起こしますから、何回も何回も散歩に出かけることになります。さて、いかがでしょうか？

もちろん、Y男さんは、重度の知的障害者ですから、今上げた①から⑤の行動を意識的に考えて行動していくわけではない。オートマティックに、あるいは無意識に、気がついたら、散歩に来ていた、気がついたら、野菜を丸かじりしていた、というような状態の中で、行動は生起しているのである。

ではどうしたらいいのか？

オートマティックな行動を中断させるために、僕らは自己選択をその間に挟みます。Y男さんでいえば、彼のもっと好きであると思われる活動〈ビデオを見ている風景〉の写真カードを用意して、交流会での女子中学生との散歩の写真カードとの二者択一を迫ります。

「Y男さん、今日中学生との交流会があるよね。いつも率先して散歩に行っているようですが、あなたの散歩の様子を見ていると、畑へ行って野菜を丸かじりしているようですので、本当は散歩に行きたくないと思っているのではないかと職員は考え始めています。交流会は、あなたが一番したいことをすればいいし、それを一緒にするために中学生も来ているんだから。散歩をしなくちゃいけないんだと決め込まなくてもいいし、もしそれが嫌なのをやっているとしたら、中学生だってがっかりなんだよ。さて、今日は二つの写真カードを用意してきました。あなたが今日、中学生と一緒にやりたいのは、いったいどちらの活動ですか？教えてください」と。

彼は、しっかりと、「ビデオ」のカードを選んだ。そして、彼のスケジュールボードに交流会の活動は、中学生と一緒にビデオを見ると掲示がされる。

そして、いよいよ交流会だ。彼は、そわそわと落ち着かない、結局、散歩に行こうと中学生の手を引っ張り始めてしまう。職員が割って入る。「今日は、ビデオって決めたんだよね。あなたが決めたことをやっぺいこう。ビデオを一緒に見たい、本当は散歩には行きたくない、そう決めることができたことが、すばらしいことなんだよ。散歩に行かなくたって、誰もダメなやつだなんて思わない、あなたはあなたの決めた通り生きていけばいいんだよ」そう促されて、彼は中学生と一緒に自分の居室に。しかし、五分もすれば、立ち上がって玄関へ向かおうとする彼、その度に職員が自己選択の妥当さを応援する。また、居室へ戻る彼。このようなことを繰り返しながら、この時の交流会は終了した。

そして、それから五年後の交流会、彼は、中学生に膝枕をされながら、ニコニコしながら、大好きなビデオを眺めている。でも、写真カードの自己選択を怠れば、相変わらず散歩に出かけてしまう彼である。

遡ること二十年前、Y男さんはキャンプに出かけると、園では絶対に食べない、大嫌いであるはずのピーマンを、バーベキューで半生の状態で食べていた。僕らはそれを「自閉症だね。形や料理法が違うとピーマンがピーマンでなくなるんだね。」と解釈していた。今になってみれば、自信を持って思い直すことができる。「Y男さん、キャンプ、大嫌いだったんだよね、きっと。良く震えながらニコニコした表情をしていたけど、あれ偽りの姿だったよね」と。

Y男さんのこの時僕らに教えたこと、それは、多くの後続く自閉症の方々の幸福を支えている。

WELCOME TO SATORU WORLD

知的障害入所施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>